演題名　新聞記事における作業療法の特徴
―ELNETアカデミックとMAXQDAを用いた分析―

Characteristics of Occupational Therapy as Portrayed in Newspaper Articles
: An Analysis Using ELNET Academic and MAXQDA

所属名　医療創生大学　総合医療学部／健康医療科学部　作業療法学科
氏名　田島　明子

【はじめに】

近年、作業療法士養成校の定員割れ、募集停止が増加している。背景として、少子化以外にも、職業の認知度やイメージの影響が考えられる。白濱（2020）によると、高校生による作業療法士の認知度は高いとは言えず、内容の認知は1割程度との結果であった。さらにイメージについても「わからない」との結果が少なくなかった。こうした一般的なイメージ形成にメディアの影響もあるだろう。

本研究ではメディアとして新聞記事を分析対象とし、メディアでの作業療法の取り上げられ方から、認知度やイメージへの影響について考察をした。

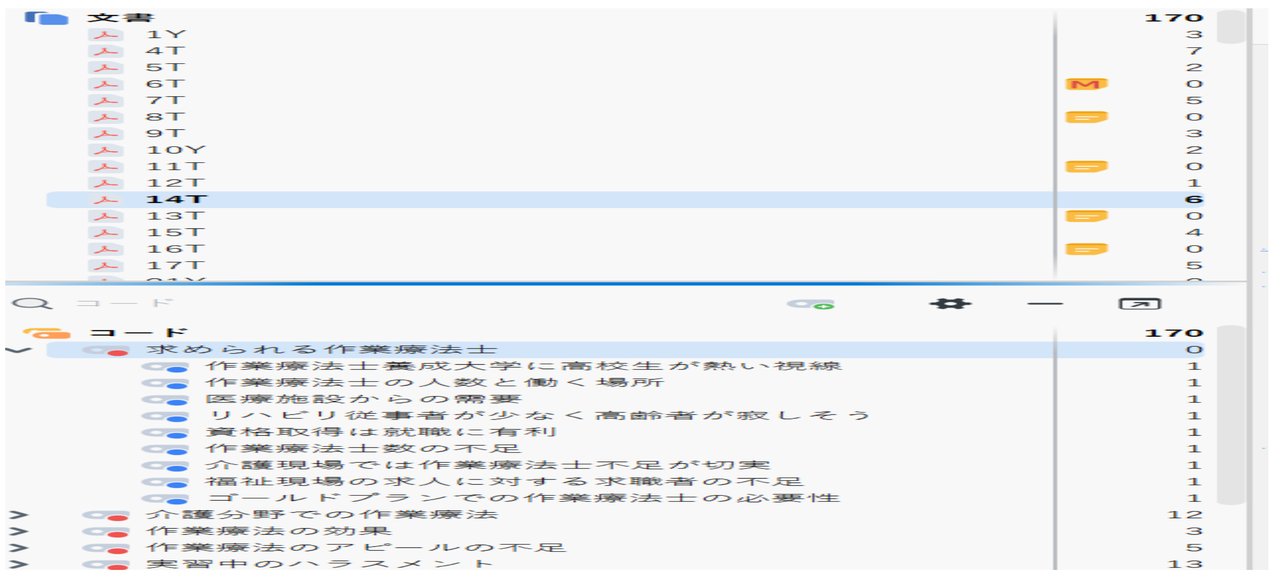
【対象】

株式会社EINETが提供する新聞記事クリッピングサービス（ELDBアカデミック）にて「全国紙」を対象とし、「作業療法」を見出しに含む記事を抽出した（アクセス2025年12月9日）。対象記事は85であった。85記事のうち閲覧不可・重複記事・研究テーマに無関係な記事を除いた56記事が対象となった。

【方法】

対象記事を質的データ分析ソフトMAXQDA(26.0.0)で分析した。新聞記事の発行年によって６区分化をし、PDF化した新聞記事を一記事ごとに精読し、作業療法に関連する要点に着目し２層性のコード化を行った（表1）。分析には上位のコードを使用した。コード・マトリックスブラウザ機能を用い、横軸を発行年区分、縦軸を上位コードのマトリックスを作成した。

表１　MAXQDAによる２層性のコード化



【結果】

●記事は1991年より出現し2025年まであり、①1990年代、②2000年から2005年、③2006年から2010年、④2011年から2015年、⑤2016年から2020年、⑥2021年以降、で6区分化した。それぞれ記事数は、①10記事、②9記事、③11記事、④7記事、⑤10記事、⑥9記事であった。下位コード総数は170で一記事あたりの下位コード数の平均3.0　（ranege:1-12）であった。

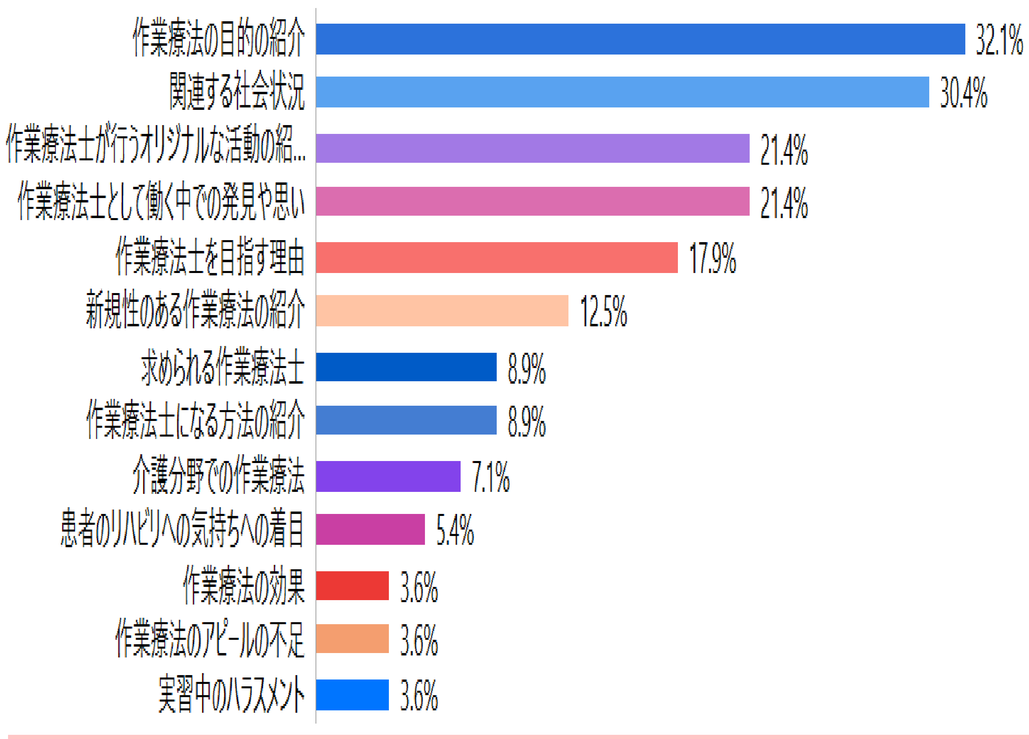
●上位コード名は〈求められる作業療法士〉〈介護分野での作業療法士〉〈作業療法の効果〉〈作業療法のアピール不足〉〈実習中のハラスメント〉〈作業療法の目的〉〈作業療法士が行うオリジナルな活動〉〈作業療法士になる方法〉〈作業療法士として働く中での発見や思い〉〈作業療法士を目指す理由〉〈患者のリハビリへの気持ちへの着目〉〈新規性のある作業療法の紹介〉〈関連する社会状況〉であった。発行年区分で見ると〈求められる作業療法士〉は①に多く、〈介護分野での作業療法士〉は②に多く、〈作業療法のアピール不足〉は①と③に多く、〈実習中のハラスメント〉は⑤に集中、〈作業療法士が行うオリジナルな活動〉は①と⑤に多く、〈新規性のある作業療法の紹介〉は⑥に多かった。その他は目立った差異はなかった（表2）。

●上位コード%は、〈作業療法の目的〉が32.1%で最も高く、次いで〈関連する社会状況〉の30.4%であった（表3）。

表２　発行年区分とコードの出現数

コードシステム	2021年以降	2016～2020年	2011～2015年	2006～2010年	2000～2005年	1990年代	合計
求められる作業療法士					2	7	9
介護分野での作業療法					9	3	12
作業療法の効果			2		1		3
作業療法のアピールの不足				3		2	5
実習中のハラスメント		12	1				13
作業療法の目的の紹介	11	6	3		5	7	32
作業療法士が行うオリジナルな活動の紹介	1	7	1		3	8	20
作業療法士になる方法の紹介	2	1	1			1	5
作業療法士として働く中での発見や思い	6	2	5		7		20
作業療法士を目指す理由	4	2	2	3	2		13
患者のリハビリへの気持ちへの着目		2			1		3
新規性のある作業療法の紹介	10	1	1	3			15
関連する社会状況	4		8	2	4	2	20
合計	38	33	24	11	34	30	170

表３　上位コードのパーセンテージ



【考察】

発行年区分ごとの新聞記事内容の特徴として4点が見いだされた。１点めは、2000年前後は、介護保険制度の導入に併せ、認知症の人や高齢者に対する安全で生きがい感のある生活を目的とした作業療法への期待感の高まりと共に作業療法士数の不足が問題視され、〈求められる作業療法士〉像が強調されていた。2点めは、2006年から2010年頃に生じた作業療法士の専門性が理解されづらいという〈アピール不足の作業療法〉像である。3点めは、2016年から2020年に集中したネガティブなイメージ生成に繋がったと考える〈実習中のハラスメント〉問題である。4点めは、近年みられる〈オリジナリティや新規性のある作業療法の紹介〉である。近年みられる、学校作業療法や障害のある受刑者への作業療法、免許センターでの高齢者への運転アドバイスなど、新規性とわかりやすいメッセージ性のある作業療法の展開が今後の認知度やイメージ向上の鍵を握ると考えられた。

今回の演題に関連して、開示すべき利益相反はありません。